



変化の時代と叫ばれるようになった。既に久しい。確かに、ポーターレス、人口の高齢化、自然保護運動の高まりなど経営を取り巻く環境は、日々刻々と変わっている。経営者受難の時代と言われる一方で、変化こそビジネスチャンスだとおだてられるのだから始末が悪い。変化の行く方が分れば苦労はない。

極める己れの助を磨くより仕方がない。それに加えて、他者に学ぶという方法がある。

かますという魚がいる。大型種は性格が荒く、肉食をする。このかますを小魚と同じ水槽に入れる。そして、両者をガラス板で仕切ると、かます

これは、いわゆる学習効果という現象。経験や知識が、考えや行動に影響を及ぼすというわけだ。かますの場合、学習したことが災いとなっていて、正しい判断や行動をできなくしている。

カエルとかますの教え

——亀井 創太郎

解決策は一つ、別のかますを同じ水槽に入れてやるのだ。新参者は本能の赴くまま小魚を食べる。餓死寸前のかますは、それを横目で見ながら、再び小魚を食べ始める。かますは己れの常識が、実は非常識であったことに気付いた時に救われる。

水を張った鍋にカエルを入れる。そして、火を焚き水を暖める。徐々に水は熱くなっていき、やがて沸騰する。中のカエルは逃げそこなって死んでしまふ。それでは、沸騰した湯の中にカエルを投げ入れたらどうなるか。カエルは一瞬の内に跳んで逃げる。

つまり、カエルにとっ

は小魚を襲うが、ただガラス板に頭をぶつけるだけで餌にありつけない。その内にとつとつあきうめ、ガラス板をはずし一縷に泳がせても、二度と小魚を襲わなくなる。そうなる、かますは最後には餓死する。さて、このかますを助けるにはどう

なるほど、社外から新たに人材を得たりアドバイスを受けたりすることによって、長年の難問が解決することがある。社外重役制度や異業種交流、といったものも、外部刺激を効果的に受ける方法だ。ポーターレス時代を迎え、地元の常識だけでは一般に通用しないことが増えてきた。『肥後藩』の住民にも異文化との交流、異質の血の導入が求められている。

(亀井通雄社長)